

SHOW HEYシネマルーム



Data

監督・脚本：ペドロ・アルモドバル
出演：ペネロペ・クルス/ルイス・オマール/ブランカ・ポルテ
イージョ/ホセ・ルイス・ゴメス/ルベーン・オチャンデ
イアーノ/タマル・ノバス

👁️👁️ みどころ

『ボルベール<帰郷>』(06年)ではあえて美貌に蓋をして、たくましい女性像を存在感タップリに演じたペネロペ・クルスが、本作ではハップバーン?それともソフィア・ローレン?と思うような「スペインの名華」としての美しさを存分に。そしてまた、大富豪の愛人役と、映画監督と恋に落ちる女優役を体当たりで熱演!

意味シなタイトルに暗示される、14年前の愛憎劇とは?そして、あれは事故?それとも・・・?そんなミステリー色も交えながら、あくまで人生を前向きに描くペドロ・アルモドバル監督の構成力とストーリー展開に拍手!

ある時はハップバーン、ある時はローレン?

『ボルベール<帰郷>』(06年)でアカデミー賞主演女優賞にノミネートされ、『それでも恋するバルセロナ』(08年)でアカデミー賞助演女優賞を受賞するなど、「スペインの名華」ペネロペ・クルスは近時大活躍。ペネロペ・クルスのペドロ・アルモドバル監督作への出演は『ライブ・フレッシュ』(97年)、『オール・アバウト・マイ・マザー』(99年)、『ボルベール<帰郷>』に続く4作目だが、本作でペネロペ・クルスはさまざまな女の顔をみせてくれる。

スペインを代表するペドロ・アルモドバル監督の映画で私が観たのは『トーク・トゥー・ハー』(02年)と『ボルベール<帰郷>』の2本だけだが、ペドロ・アルモドバル監督は中国の張藝謀(チャン・イーモウ)監督らと同じように、女優を発掘し女優からその魅力を十二分に引き出してくる監督らしい。3度目のペドロ・アルモドバル監督作品『ボルベ

ール<帰郷>』ではじめて主演したペネロペ・クルスは、そこでたくましい女性像を演じて圧倒的な存在感を示したが、2度目の主演を果たした本作ではペネロペ・クルスはどんな魅力？

ペネロペ・クルスは本作で、一方では大富豪エルネスト・マルテル（ホセ・ルイス・ゴメス）の愛人として、他方では新進気鋭のマテオ・ブランコ監督（ルイス・オマル）と固い信頼で結ばれた女優として、若さいっばいの魅力をみせつけてくれる。エルネストの愛人となる前のレナは貧乏で父親の病気を救うことができなかったが、エルネストの愛人となってからはその生活が一変した。

さらにマテオが監督する『謎の鞆と女たち』への出演が決まってからは、さらにその生き方が一変。しかし、そこで見せるレナの女優の顔はある時はオードリー・ヘップバーン、ある時はソフィア・ローレン？

過剰な愛と拘束は女冥利？それとも負担？

貧乏人の娘が美貌と若さを武器に大金持ちの男に見初められて愛人となり、次第にのしあがっていくというストーリーはよくあるもの。父親の病気を契機にエルネストから援助を受けて、エルネストの愛人へと変身していくレナの姿をみていると、まさにそれ。もっとも、そこからさらに進んで「籍を入れてくれ」「イヤ、それはダメだ」などの痴話喧嘩が生まれてくると、2人の関係はもうダメ。そんな風に相場は決まっているが、エルネストとレナの関係は籍を入れないまま順調に維持されているようだ。

エルネストとレナの関係に亀裂が入ったのは、もともと女優志望だったレナがマテオ監督の『謎の鞆と女たち』のオーディションに出ると言い始め、見事それに合格したため。エルネストにしてみれば、レナの希望はできるだけ聞いてやりたいが、どちらかというところの中に囲い自分だけの楽しみにしたいのが本音。それはレナが外の世界に目を向けたり、女優として周りからチヤホヤされ始めたりすると、ロクでもない男が寄りつかないとも限らないからだ。エルネストがそう考えたのは当然だが、それにしても息子のエルネストJr.（ルベーン・オチャンディアノ）に常時カメラを持ってレナの行動を監視させるというのはいかがなもの？

エルネストは結構な年だが、セックス面におけるタフさは「この年で6回もいったら大変だ」という言葉からわかるとおりすごいらしい。しかも、肉体的な愛だけではなく、金銭面を含む精神的な愛も過剰なほどレナに注いでいたから、レナは女冥利？それともエルネストJr.による監視を含めた過剰な拘束は負担？

監督と主演女優がこれでいいの？こりゃ体験談？

主演女優とそれに抜擢した監督がいい関係になり、いつか結婚。そんなパターンは世界中に多いが、そんな「公私混同」は基本的にいかがなもの？それが一般的な基準だと思

うが、本作にみるマテオ監督による新人女優レナの起用はかなりの力加減。だって、オーディションは広く公開されたものではなく、マテオ監督の直感で「演技はイマイチだが、この女優はいい」と思っただけで抜擢したのだから。

そんなマテオ監督のやり方に反発を覚えたのは、マテオ監督の元恋人(?)で、今は『謎の鞆と女たち』のエージェントをしているジュディット・ガルシア(ブランカ・ポルティージョ)。しかし映画製作における監督の権限は絶対だから、レナを女優として送り出すと同時に映画の出資者にもなったエルネストが口出しできないのと同じように、ジュディットもマテオ監督の決定に従う他なし。もっとも、マテオ監督とレナが恋に落ちたのは仕方ないが、撮影現場におけるアツアツぶりや、関係者をシャットアウトした上での密室でのエッチはさすがにまずいのでは?まさか、こんな風景はスペインを代表するペドロ・アルモドバル監督の体験談?

「マテオは死んだ」との言葉の重みは?

映画冒頭の舞台は、2008年のマドリード。登場人物は目の不自由なおじさんで、脚本家のハリー・ケイン(ルイス・オマール)。彼はたくさんの買い物をして今日もやって来た女性ジュディットとその息子ディエゴ(タマル・ノバス)の助けを借りているらしく、脚本を書く仕事も若い女を連れ込んでの情事もうまくやっている様子だから何より。しかし、これはあくまでプロローグにすぎず、話は一転14年前に彼がマテオ・ブランコと名乗り、新進気鋭の映画監督として『謎の鞆と女たち』を撮っていた時の物語に移っていく。

そんな風に時間軸を勝手にずらすことに寄与する男が、ハリーに自分の初監督作品の脚本を書いてほしいとやってきた男ライ・X。そのストーリーの軸は「父の記憶に復讐する男の物語」らしいが、それを聞いてハリーが思い出したのが、14年前に自分の記憶から抹殺した男エルネストのことだ。そう、今見えない目の前にいる男ライ・Xは、かつてカメラを持ってマテオの愛する女性レナにつきまとっていたエルネストの息子なのだ。しかし、なぜそんな男が私の目の前に?隠されたハリーの過去にがぜん興味を示し始めたディエゴに求められるまま、ハリーは14年前の物語を語り始めたが、その最大のキーワードは「マテオは死んだ」。つまり、新進気鋭の映画監督マテオは死に、以降もう1つの名前ハリー・ケインとして今日まで生きてきたというわけだ。このようにマテオは実際に死んだわけではないが、「マテオは死んだ」との言葉の重みは?

女の嫉妬は怖い、男の嫉妬だって・・・。

本作は『抱擁のかげら』というしゃれたタイトルになっているが、そのタイトルの意味は?日本でもキスとか抱擁とかの言葉は一般化しているが、本作の登場人物は情熱の国スペインの男女だけに、キスや抱擁のレベルが淡泊な日本人とは全然違う。エルネストが豪華な家の中でレナと交わす抱擁、マテオが逃避先のホテルの部屋の中で、あるいは美しい

海岸でレナと交わす抱擁。そのそれぞれの熱さは、日本人が交わす抱擁とは大違いだ。

他方、女でも男でも愛する男や女をめぐる嫉妬心は万国共通。しかるところ、本作の中盤はマテオ監督のもとに走ろうとするレナに対する、エルネストの嫉妬が物語の軸となる。自分の愛する女が他の男に走ろうとする姿をみた場合、男は嫉妬に狂い女に対して暴力を振るうことになりがちだが、さてエルネストの場合は？ そんじょそこのチンピラではなく、地位も権力も手にしている大人の場合は嫉妬心の表し方も違うのかなと思っていると、意外にもそうではないことが本作をみればよくわかる。レナの顔や太ももについたあざは一体なぜ？ またレナは公式には階段を踏み外したと発表しているが、映画撮影中に主演女優が階段から落ちて足を骨折し車イスに乗らなければならなくなったら映画製作はどうなるの？ そしてまた、映画製作を途中で放棄し、レナと2人で逃避行に出たマテオが聞いたプレミア上映された『謎の鞆と女たち』の評判は？ まっこと女の嫉妬は恐いが、男の嫉妬だって・・・。

あれは事故？ それとも？

私は今年3月末で弁護士生活が丸36年になるが、その間一貫して交通事故の事件をたくさん扱ってきた。今でこそ写真やビデオによる事故状況の解析が進んだが、「交通事故戦争」と呼ばれていた1970年代では事故状況の解析は困難だった。マテオの目が見えなくなったのは、あの日、あの時の交通事故のせい。それは、逃避先のホテルで、プレミア上映された『謎の鞆と女たち』の最悪の評判を聞き、マテオが急遽バルセロナに戻る途中で起きた事故だが、マテオの運転する車の右側面に相手車がモロに衝突してきたから大変。これにて、助手席に乗っていたレナは即死し、運転席のマテオは死亡は免れたものの、完全に失明してしまったというわけだ。

本作は『抱擁のかけら』というタイトルからわかるとおり、レナを軸とした三角関係の愛憎劇(?)だが、この事故は偶然の事故？ それとも・・・？ これ以降、物語は俄然サスペンス性を帯びてくる。それを盛り上げるのは、第1に誰にも行く先を知らせないままレナと共に失踪したマテオがジュディットに電話をしたにもかかわらず、ジュディットが電話に出ないため滞在するホテルの電話番号を教えたこと。そして第2に、ホテルを出発したマテオの赤い車を、何とエルネストの息子エルネストJr. が車で追尾しているシーンが登場することだ。今やとことんマテオとの関係が悪化し、自分がプロデューサーとなっているマテオ監督作品『謎の鞆と女たち』をボロボロにすることに意欲を燃やしているエルネストなら、やっと見つけたマテオとレナに対して、考えられる最悪の報復措置をとったとしても不思議ではない。さあ、あれは事故？ それとも・・・？

「前向き」がペドロ・アルモドバル監督のキーワード？

ペドロ・アルモドバル監督の『トーク・トゥー・ハー』は、昏睡状態にある2人の女性と

それに付き添う二人の男性の姿を淡々と描いたもの。その理解は少し難しいが、『トーク・トゥ・ハー』というタイトルがいかにもピッタリだったし、二人の男の友情にもなかなかの重みがあった（『シネマルーム3』208頁参照）。

他方、『ボルベール<帰郷>』はペネロペ・クルスを中心とした6人の女達が紡ぐ物語で、犯罪を含めたミステリアスな要素もあるが、「母娘の再会と和解」が最大のテーマで、人生讃歌となるこの映画はあくまで前向きだった（『シネマルーム13』198頁参照）。本作につけた私の採点星4つは奇しくもこの前2作と同じだが、全3作とも星4つをもらったペドロ・アルモドバル監督は立派なもの。

私が前2作の評論を読み直して思うのは、ペドロ・アルモドバル監督の作品は「前向き」がキーワードだということだが・・・。

ペドロ・アルモドバル監督の構成力に拍手！

ハリー・ケインがディエゴに語るスタイルの中で明らかにされる14年前の愛憎劇はドロドロしたものであるうえ、エルネストとマテオの対立の結果はレナの死亡とマテオの失明という何とも悲惨なもの。しかし、映画冒頭に描かれる今を脚本家として生きているハリー・ケインは全てを達観しているように見える。それは一体なぜ？ハリー・ケインは今なお、あの事故はエルネストが仕組んだものと考えているのでは？そんなハリー・ケインの、エルネストに対する恨みは？そしてまたエルネストはどこに？

普通の人間はそんなさまざまな疑問を持つはずだが、その真相が明らかされるのは物語のラストに至ってのこと。その「告白」をするのは、すべての事情を知ったうえで、今ハリー・ケインの世話をしているジュディット。ハリー・ケインは今やっと自分の気持を整理して、心静かに脚本家として生きているのに、今さらのジュディットの「告白」はかえってマイナスになるのでは？そんな心配はもちろんあるが、そんな「告白」をもきっちり消化し、あくまで人生を「前向き」に捉えていくペドロ・アルモドバル監督の構成力に拍手。

2010（平成22）年2月8日記